



前も書いたが、毎日一人のホームレスを見ていた。いつもおどおどした目をして商店街のアーケードの角で昼はたたずみ夜は一人で横になっていた。道路の反対側にもやはり数人のホームレスがいつもいたが、彼はそこに混じろうともせずいつも静かにたまには周囲の掃除などをし、朝になると荷物を片付け、祭りにはさっぱりした服装をして新しいスニーカーや帽子をかぶりなるべく迷惑にならないようにしている様子が目立っていた。たまに他のホームレスと話していても、どこか野性的な異質さで浮いており、いつもひとりだった。

それは、彼のせつかくれた、黙認されている寝泊まりの場所を確保しておきたい気持ちのあらわれであっただろう。ひとりだとが込んでそこにいながら黙認してもらえれば、店先で群れて昼間から酒を飲んだり、ゴミをちらかしたりしたらいられなくなるということ

がわかっていた。もう10年以上も続いている今の平穩にすぎた時間をそのままにしておきたかったから、彼は他のホームレスを追い払い、雪や台風の日も、暑さこうたる日もずっと一人だった。

しかしここ数年折りたたみベッドを用意してそこで寝るようになってから、その目立ち方が気になりはじめた。それでも彼は荷物をしゃまびりにくい場所にかたづけしていたが、目立つものはいたしかたがない。毎日見ている私の心の中で秒読みが始まった。これは力学なのだ。目立つという力が生じれば、そこに接触し、反発し、ぶつかったり跳ね飛んだりして転がってゆき、結局どうなるかは目に見えている。

ある日、大男と立ったまま向き合って話し合っている場面があった。数日それが断続的に続き、その大男が夜だけ来て寝るようになった。そうすると後は早い。大男は酒を飲み、ものを投げた歩行者に叫び、店先をどろどろに汚し、前からいた男はだんだん小さくなって横になり、よけいにおどおどした目で落ち着かなくなった。もう時間の問題だと思ってから数ヶ月はたった。ある日、汚れきった場所にロープが張られ、大男はいなくなった。そして一ヶ月、店先は徐々に清掃されて、前からいた男の寝る場所も小さくなり、ある日から消えてしまった。その後、おいてあった折りたたみベッドも半月ほどで消え、一度、昼間、同じ場所でベッドを置いてあった空間をじっと見つめていた彼を見たが、以降見る事がなくなり、店先はロープで囲われたままになっている。

ただそれだけの現実なのだが、単純に計算してその男の顔を5000回ほど見続けていたわけだから、こちらは毎日の彼の心の波風が見える気さえしていた。いつも同じ立場になるかわからないし、私ならどうしようかと、いつも真剣に考えていたので、やはり気になるのだ。街をママチャリで過ぎていくと、たくさんもののがみえてきて、メディアの波にのったわかりやすい言葉の数々が、あさましく思えてしかたがない。あの、毎日ゴミ箱の前に真冬でもTシャツ一枚の体を丸めてハシをつっこんでものを食べている体だけは大きな青年の置き去りにされたいは、どうなるんだ、その肉親の悲しみはどうなるんだ、このあげ店若衆二人に囲まれておまえなんか、この町にいられないようにしてやるのは簡単なんだ！」と大声で怒鳴られつつも消えるような声で刃向かっていた腰の曲がったひよろひよろのばあさんの声は誰が聞いた。どんどん街から消えていく工場や商店の男や女達の声を誰が聞いた。年配者をまとめて捨てて若者ばかり集めてきれいになった店ばかりそろえて、町おこしが「隣町に進んでいるなど」と言っているやつらの頭を誰がぶんなくるのだ。髪を乱して、見台を引きずるように歩いていったまま戻ることのなかった手相見のばあさんはだれか面倒見ているのか。

さまざまな景色がよぎり、私は路上で本当に沢山のことを教えてもらっている。毎日同じことばかり繰り返しているマスメディアのスマートでシンプルな言葉におどらされずに、私に何が出来るのかともう一度、いや何度でも自分の頭で考えてみようみなさん、路上に出てみませんか。ちなみに自宅から事務所まで電車でも55分、ママチャリでゆっくり走って1時間5分。それにしてもあの男は消えたんじゃない。どこかにいるはずなのだ。

1月のまなざしの編集は15日におこないます。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX03-5600-0195 高村 哲 GnomesJPN@aol.com